

の意義を探索し、アメリカに合った在家も参加できる儀礼を創造すべきである。

・伝道方法のアメリカ化 【真宗】デイスカッション式の伝道が求められている。またウェブサイトや勉強会を持つことは必要不可欠である。【曹洞宗】アメリカ人は平等性を求める反面、カリスマ性のある強い指導力を持った老師を求めている。在家者への坐禪を通した伝道を中心とし、説明を多くしていかなければならない。

・僧侶育成のアメリカ化 【真宗】 将来英語だけで、日本で修学することと同等のものが獲られるように、指導者の育成と教
学書の翻訳が望まれている。【曹洞宗】 大勢のアメリカ人僧侶
を抱えており、日本の組織との制度の整合性の構築が大きな課
題である。

今回のアンケート対象者は七名と少数であったが、これらの資料で一応の傾向を考察した。今後資料収集と現地僧侶へのさらなるインタビューとアンケートを実施し、多種多様な角度からの調査を進める予定である。今回は真宗と曹洞宗が、アメリカで直面している課題を示したが、真宗で最も注目すべきは教
学の非二元化と「坐禅」を取り入れるか否かという課題で、曹洞宗では欧州系中心の「禅センター&非登録団体」と日本の曹洞宗の関係を課題と考察する。共通の課題は、無我を説く仏教を、我を尊重するアメリカで、その本質を伝えられるかという挑戦である。またいずれは日本とアメリカ間で、本山・制度というものは別れていくかもしれないが、教学に関しては対話を続けるべきであると考ええる。

第七部会

宗教的観点からの森林の思想と価値

神守昇一

二一世紀は環境問題解決のために世界中で対策が考えられている。日本の統計局の調査結果では、先進国と呼ばれる国々では人工林が多く、逆に発展途上国と呼ばれる国々では自然林が多い傾向であるが、その中でも日本は人工林、自然林の陸地に対する面積の割合が共に高いという世界でも珍しい国である。これは、気候、風土が植物の生育に適しているという点以外にも日本の文化、思想が大きな影響を与えているためであると考えられる。そのために自然を畏敬するという考えを持つ日本固有の神道に世界的な注目が集まっている。日本人は山川草木など様々なものに神の存在を見出してきた。その考えは若林強齋の『神道大意』などにおいて見出すことができる。

普段多くの神は山や森林に鎮座されていると考えられている。例えば『古事記』、『日本書紀』には、大国主神とともに国作りを行っていた少彦名神が常世の国へ去った時に、大国主神が「私ひとりはどうやってうまくこの国を作ることができようか。どの神が私と一緒によくこの国を作ることができようか。どの神が私と一緒によくこの国を作るだろうか」と言うと、海の向こうから光輝いてやってくる神が現れた。その神は大国主神の和魂であり、大和国の東の山の上に祀れば国作りに協力すると言ったために、御諸山に鎮座されたという記述がある。そ

の山は現在の三輪山であり、神体山として今も信仰されている。神が鎮座している山、森林などは神奈備と呼ばれ、神の鎮まる場所であるために禁足地となっている所が多く、自然林として古来の姿を残していることが多い。また、一般に自然の樹木が密生繁茂している区画を森と言うが、神が降臨して、鎮座する依り代となるような木が存在する特別な森は、『万葉集』にあるように社、神社と表記され、これらは今日にも神社、鎮守の杜と呼ばれる存在として残っている。

また、神道には植林文化や樹木に関する儀礼も存在する。『日本書紀』には素戔鳴尊による植林の記述があり、儀礼では樹木を伐採する前に神の許しを乞い、その伐採の最中の安全を祈願するものがある。神宮式年遷宮の際に行われる山口祭、木本祭、御杣始祭、御船代祭、仮御樋代木伐採式などは、古来よりの慣習を今もなお現代に伝え続けているものである。さらに、樹木を伐採した後の切り株に挿し木を行い、樹木の再生産を祈願する鳥総立てという文化があるが、その起源も古く、『万葉集』には「鳥総立て、足柄山に、船木伐り、木に伐り行きて、あたら船木を」という歌があり、これは好きな女が他人と親しくなってしまったのを惜しんだ歌であるが、このような表現が用いられた背景には、常用の習俗があったと考えられ、昔は鳥総立てが盛んに行われていたと考えられる。

このように日本が世界的にも有数の森林を保有している理由を考察してみると、古代から現在まで途切れることない神道の山川草木などに神を見出し、森林には神が鎮座していると考ええて必要以上に樹木を伐採しなかったこと、樹木の伐採前後に儀

礼を行い、植林をするという文化を風化させることなく持ち続け、実行してきたことが現在の日本の森林状況に大きな貢献を果たしていると考えられる。

そして、神社及びその森林には国民の慰安、人情を養い、天然風景と天然記念物を残すなどの価値を見出すことが可能であり、また神社の古来より続く森林の植生を調査することによりその地域における最適な植林活動が可能であると考えられる。森林問題は政治、経済、自然環境など様々な要因があるが、その解決に重要な点は森林が貴重なものであるということを書物、儀礼、口伝などを用いて代々伝えていくことであろう。

古代神宮祭祀における聖体示現

新田佳恵子

古代神宮祭祀における「聖なるもの」の顕現について、太玉串行事の古儀を解釈し、その宗教現象を考察した。

古代の太玉串行事は、『皇太神宮儀式帳』に三節祭と神御衣祭、幣帛駅使の時に太玉串という櫛に木綿(ユフ)を付けたものを天八重櫛とともに使用したことが記載されている。

太玉串と天八重櫛は、神宮でしか用いられないことと、天八重櫛は内宮でしかないことから、この二つは天照坐太神の祭祀に係っている。そして、太玉串に使用される祝詞の「前」と「地名・場所」二稱辞竟奉が、本座ではなく、神を迎える神座を指し、迎えられた祭神と迎えた祭祀者とは近い距離にあるということが明らかになっている(白江恒夫『祭祀の言語』)。このことから、正殿ではなく、太玉串と天八重櫛に近い処に